

二〇〇〇年八月、ペルー北部高地のカハマルカ県に位置するタンタリカ遺跡で第二次発掘調査を始めた。遺跡は辺鄙なところにあり、車道から細い尾根沿いの小道を約一時間歩く。付近にまとまった集落はなく、数百メートルごとに家がぼつぼつと散在するだけである。ほくら調査者四人は、ロバを一頭ほど借りて発掘機材、食料をはじめとする生活必需品を運び込み、遺跡のある山の麓にテントを張ってキャンプをした。最寄りの水場までは歩いて一五分ほど下らなければならず、水汲みは雇った番人に頼んだ。食事は付近に住んでいる女性に準備してもらった。

テレビも新聞もないタンタリカ周辺では、ラジオが最大の情報源である。遺跡のある山の頂上部は標高三二〇〇メートルもあるため電波の入りは非常によい。だから遠くの町に住んでいる家族や親類が連絡をす際には、ラジオを使う。たとえば「A村の誰々さん、お母さんが倒れたからすぐB町に行くように」というメッセージが流れる。本人は聞いていなくても、きくと誰かから本人に伝わる。みな知り合い同士だからである。

盗賊パタ・デ・ペーロ

発掘調査が始まったら、あちこちから働きたいという人が集まってきた。みんなジャガイモや豆類作りで生計を立てている農民なので、土を掘るセンスはかなりよい。多くは片道一時間以上歩いてくる。一番遠方に住むラモンは、朝五時に家を出るというから、徒歩で往復五時間の通勤である。月曜から金曜日は朝八時から午

山の噂は霧のごとし

人間関係が狭く濃密なアンデスの山の世界に、秘密というものは基本的に存在しない。隠し事をすればあらぬ噂を立てられるし、噂はあつという間に広まる。それをペルー人は言い訳の天才で、言ったことに対して責任をとることは、めずらしい。会話が最大の楽しみで、聞いた話ほとんど広まる。

火のないところに噂は立たぬ、というのが火を突き止めるのはとても難しい。噂には出所があるはずなのだが、誰に聞いても「みんなそう言っている」という答が返ってくるだけである。いったい本当にパタ・デ・ペーロが率いる強盗団はやってくるのか、それともがせネタか、誰かの嫌がらせか。気を回すばかりで答は出ない。

当時は最寄りのカタン村(徒歩で一時間)には電話はなく、緊急の場合は三時間歩いて町に下りるしかなかった。警察に頼りたくても頼れないし、恐れをなして逃げ出すのもいやである。結局カタン村の村長に相談して、二四時間番人をつけ、もし本当に盗賊団がやってきたら抵抗せずすべてを捧げることにした。そして毎週土曜日の給料の支払い、カタン村でおこなうと伝え、現場には現金をもつていないように見せかけた。おまけにわざわざこちらの居所を知らせるため、毎晩ロケット花火を上げた。それが功を奏したのか、パタ・デ・ペーロが来る様子はいっ



奥の三角形の山がタンタリカ遺跡。頂上部の標高3289m。頂上部から麓まで建築が連なる大遺跡である。時代はAD1200~1600年



中腹の建築群。高さ4~5mの壁が表面から確認できるほど。保存状態がよい

後四時まで、土曜は昼二時まで働いて、週給一〇五ソール(約四〇〇円弱)。彼らにとって魅力的な現金収入である。約一カ月間の短い期間であるが、人夫と番人、合わせて合計二五名を雇うほくら調査隊は、田舎では大企業といつていい。

調査を始めてから数日後、ひょうきん者のフロレスミローが、血相を変えてやってきた。そしていつもとは違った重い口調でほくらに言った。「ドクトール(博士)、盗賊団があなたたちを狙っているようだ」と。

折しも同じ年、タンタリカ遺跡のそばにあるチヌキマンゴ村で、会計係が五、六人組の盗賊団に襲われ、現金を出すのを拒んだために射殺されるという事件が起こったばかりであった。盗まれたお金は約二〇〇〇米ドルだというが、ほくらはそれ以上の現金をもっている。ペルーの山間

うにないまま、五週間にわたる発掘が終わった。アンデスの山の霧のごとし、いつとはなしに噂は立ちこめ、ほくらをくらし、そして消えてゆく。ときには噂が作り出す世界に惑わされながら、ほくらは遺跡に眠る過去の歴史を解明しようとするのである。



ペルー北高地には多様な帽子があり、形によって出身地がわかるほどである。つばの広い帽子がもっともポピュラー



ロバの上に立つフロレスミロー。隣にいるのは義理のお姉さん



タンタリカでの夕焼け

盗賊団が やってくる!?

見ごろ・
食べごろ
人類学

渡部 森哉

(わたなべ しんや)

日本学術振興会特別研究員
東京大学大学院総合文化研究科